

国際シンポジウム一一

『講演録』国家形成と鏡・刀剣——宝鏡・神剣の原形と歴史的背景——

笹生 衛

今日は、国家形成と鏡・刀剣ということで、話をさせていただきます。

『古事記』『日本書紀』（『記紀』）の中に多く登場する利器と武器に、鏡と刀剣があります。代表例が、『古事記』天石屋戸段の「八咫鏡」です。この八咫鏡は、延暦二十三年（八〇四）に編纂された『皇太神宮儀式帳』では、天照大神の「御形鏡に坐す」とあり、神を象徴する宝鏡となっています。同時に、刀剣そのものも神として扱われます。こちらの代表例は石上神宮の布都御魂（フツノミタマ）です。神武天皇が東征の折に天上から下された刀。これが神として祀られています。一方で、鏡と刀剣は、神への捧げ物として使われてきました。神社に奉納された美しい鏡や刀剣を見ることが多いと思います。

この鏡と刀剣は、日本列島にもともとあつたものではありません。弥生時代、大陸からもたらされた、当時、最新の利器と武器、これが金属製の鏡と刀剣でした。

もう一つ、『記紀』において重要な品として扱われるものに、勾玉に代表される玉があります。この玉については、

日本列島で生まれた勾玉の伝統があります。日本列島の玉の伝統は古く、縄文時代中期（約五〇〇〇年前）のヒスイ製の大珠や、後期（約四〇〇〇年前）の多様な形の玉まで遡り、その流れの中に勾玉は位置づけることができるのです。つまり、金属製の鏡・刀剣は、勾玉とは対照的な、弥生時代から古墳時代にかけて、中国大陸・朝鮮半島から伝わった最先端の技術と文化を象徴するものだったと言つてよいでしょう。

先ほどのサイモン・ケイナー先生のお話ですと、弥生時代と同時期の紀元前後、イギリス（ブリタニア）に対し、先進的な文化をもたらす地域としてローマ帝国があります。当時、ローマ帝国は、ヨーロッパ地域では文化的な中心地となっていました。東アジアで、これに対応する存在が漢帝国になるわけです。その漢帝国の文化や技術を象徴するものが、鏡や刀剣であつたと言つてもよいのではないでしようか。

この漢帝国の文化が及ぶ外縁部に日本列島は位置していました。そこで、国家が形成される過程や歴史的背景を、東アジア的な視点から考える上で、鏡・刀剣は重要な意味を持つていました。さらに、鏡と刀剣には、時代ごとに象徴的な文字が刻まれていました。そこで、ここでは、この鏡・刀剣と日本列島における国家形成の関係について、刻まれた文字とともに考えてみたいと思います。

二、古墳時代前期の鏡と信仰

鏡の出現 日本列島で、鏡は弥生時代中期初頭（紀元前四〇〇年頃）までには出現していました。弥生時代、稻作が伝わるということは、皆さんよくご存じだと思います。しかし、稻作だけではありません。魚を捕る漁法、特に、網の錘の新たな形「管状土錘」が伝わり、現在につながる漁網の形が成立します。これも中国大陸から朝鮮半島を経て

伝わったものです。弥生時代は、稻作の導入や金属器の使用だけでなく、漁撈においても大きな変化があつたのです。

このように、縄文時代と弥生時代の間の社会的な変化は、やはり大きかつたと言つてよいでしょう。稻作は、紀元前約一〇世紀頃、日本列島に伝わり、次第に定着していきました。その中で、金属製の利器や武器の使用が始まります。銅鏡は、その一つです。

まず、最初に日本列島に入ってきた銅鏡は「多鈕細文鏡」です。円形の鏡で、背面には複数の鈕（紐を通して摘みとする突起）が付き、細かな幾何学文様を刻んでいます。この鏡は、弥生時代の中期初頭（紀元前四〇〇年頃）には出現し、主に九州から西日本に分布します。多くは、副葬品とし墓に納められた状態で出土しています。しかし、福岡県小郡市の若山遺跡三区では二枚の多鈕細文鏡を土器に入れて埋納した例が確認できます（速水、一九九三）。銅の合金で光り輝く銅鏡、それは当時の人々にとつては、見たことのない特別な品と感じられたはずです。このため、死者や、神のような特別な存在への捧げ物として、日本列島への伝来当時から使われていた可能性は高いでしょう。

漢式鏡への転換 日本列島の銅鏡が大きく変化をする画期は、紀元前二世紀末期（弥生時代中期の後半）です。紀元前一〇八年、中国大陸の漢帝国（前漢）が、朝鮮半島に植民都市として樂浪郡を設置しました。場所は、今の北朝鮮の平壤の近くです。そして日本列島へと、さまざまな面で漢帝国の影響が及ぶようになります。その中で漢帝国の銅鏡「漢式鏡」が日本列島内に流入してくることになりました。これと入れ替わりに多鈕細文鏡は姿を消していきます。漢式鏡は円形の鏡で、鈕は背面の中央に一つ。その周囲には様々な文様・図像を配置する。これが漢式鏡の特徴です。この後、八世紀（奈良時代）に、中国の唐帝国の鏡「唐式鏡」が普及するまで、漢式鏡は日本列島で使われた鏡の基本形となりました。

当然、鏡ですから、中国では神聖なものというより化粧道具として作られました。銅鏡は、銅と錫の合金、青銅で作ります。特に錫の含有量を増やせば白銀に輝き、白銅質の鏡となるわけです。円形で美しく輝くという特徴のため、比較的早い段階から鏡には宗教的な意味が織り込まれ、日月や宇宙を象徴するような意識があつたようです。ですから、鏡の背面には、神仙や四神の玄武・青龍・朱雀・白虎といった靈獸を表現し、また、縁起の良い文言「吉祥句」を配置しました。陰陽の調和、不祥（悪いこと）を避けるといった内容の文様や文字を刻む。当然、それは中国大陸の言葉と文字、漢文で刻まれました。

画文帶神獸鏡の登場 このような鏡の中で、最も精緻な鏡が日本列島に入つてきます。それが「画文帶神獸鏡」といわれるタイプの鏡です。鏡の背面には、細かな表現で神仙と靈獸を表現します。神仙と靈獸を表現する銅鏡で年代が特定できる例には、後漢の元興元年（西暦一〇五年）の銘を刻むものがあります。紀元後二世紀の初頭頃には、この種の鏡が作られ始めていたことになります。そして、整った形の画文帶神獸鏡では、永康元年（一六七）の銘のものが確認されており、このタイプの鏡が日本列島に入つてきました。邪馬台国が魏へ朝貢する西暦二三九年以前、三世纪前半までは日本列島には入つてきていたようです（福永、二〇〇五）。

鏡の背面の模様を見ると、中心の鉦の周辺（内区）に四人の仙人と靈獸を配置し、この周囲に半円と四角の枠を交互に配置する。半円の枠内には雲を表現し、四角の枠内には四字の漢字で銘文を刻みます。外縁部分（外区）には、竜が引く雲車（雷車）に乗つて運行する日と月を表現しています。

三世纪になると、この画文帶神獸鏡が、日本列島の中央、ヤマト地域（奈良県）を中心として集中的に分布するようになる。三世纪、奈良の纏向遺跡を中心とするヤマト王権が成立する段階に、この鏡を入手したり配分したりする

ことで、ヤマト王権は政治的な求心性を強化していたと考えられています（福永、二〇一三）。この画文帶神獸鏡を入手することが非常に大きな政治的な意味を持ち、それはヤマト王権が成立する三世紀の段階で大きな役割を果たしていました。このような指摘が、考古学の研究からなされているわけです。

内区の神仙 では、この鏡の図像と銘文について、纏向遺跡に隣接するホケノ山古墳（奈良県桜井市）から出土した画文帶神獸鏡で細かく見てみたいと思います（第1図）（榎原考古学研究所編、二〇〇八）。

内区には、どのような神仙が表現されているのか。まず、上方に「伯牙」という琴の名手の仙人がいます。膝の上に琴を置き弾いています。脇には、侍者と親友の「鍾子期」を表現しています。鍾子期は、伯牙の琴の音の良さを知る親友「知音の友」に当たります。

伯牙の右下には、「東王父」がいます。頭部に三本の棒が立つ冠を被る、陽の気をつかさどる仙人です。東王父は、竜と虎の竜虎座に座っています。東王父と鉢を挟んで対面する形で、伯牙の左下に表現されるのが、「西王母」です。双鬚と呼ばれる、両端を丸く纏めた鬚を結つており、二匹の鳳凰の鳳凰座に座ります。こちらは、陰の気をつかさどる仙女です。東王父と西王母は陽と陰の気を象徴し、伯牙の楽（琴の音）で、陽と陰の調和を図る。このような構成となっているわけです。

そして、一番下に「黄帝」が表現されています。古代中国の伝説上の皇帝です。冠を被り、左右に二人の侍者を連れています。陰陽を司る神仙として、ここに表現されています。これら神仙は、陰陽五行の考え方に行わせて配置されています。



第1図 ホケノ山古墳出土「画文帶神獸鏡」
(奈良県立橿原考古学研究所編『ホケノ山古墳の研究』より)

銘文の意味 この内区の神仙の周囲には四角の小さな枠を配置し、一枠に四文字の漢字を刻んでおり、全部をつなぐと、次の銘文となります。

吾作明竟、幽煉三剛、配像世京、統德序道、敬奉臣（賢）良、彫刻無祀（祉）、百身举楽、衆事主陽、世德光明、富吉安樂、子孫番昌、土（位）至高升、生如金石、其師命長。

この銘文は先行研究（車崎、二〇〇三）を参考に読むと、おおよそ次のように解釈できるでしょう。

吾が作りし明き竟（鏡）は、三剛（三種類の金属）を幽く煉り、像を配すること世京（萬彊）にして、徳を統め道を序べ、敬い奉ること賢良にして、彫刻は止まる無し。百身（伯牙）は樂を挙げ、衆（おお）くの事は陽を主どり、世の徳は光明にして、富かに吉く安らかに楽しみ、子孫は蕃え昌んにして、位は高く升り至り、生は金石の如く、其の師の命は長からん。

ここには、この鏡の特性として「世徳光明、富吉安樂、子孫番昌」といった吉祥句を多く連ねています。神仙の図像とともに、この銘文は宗教的な意味を持つてくるということになります。ただ、ここで問題は、画文帶神獸鏡の画像や銘文の意味と価値を、当時（三世紀頃）の日本列島の人々は理解できたのかという点です。

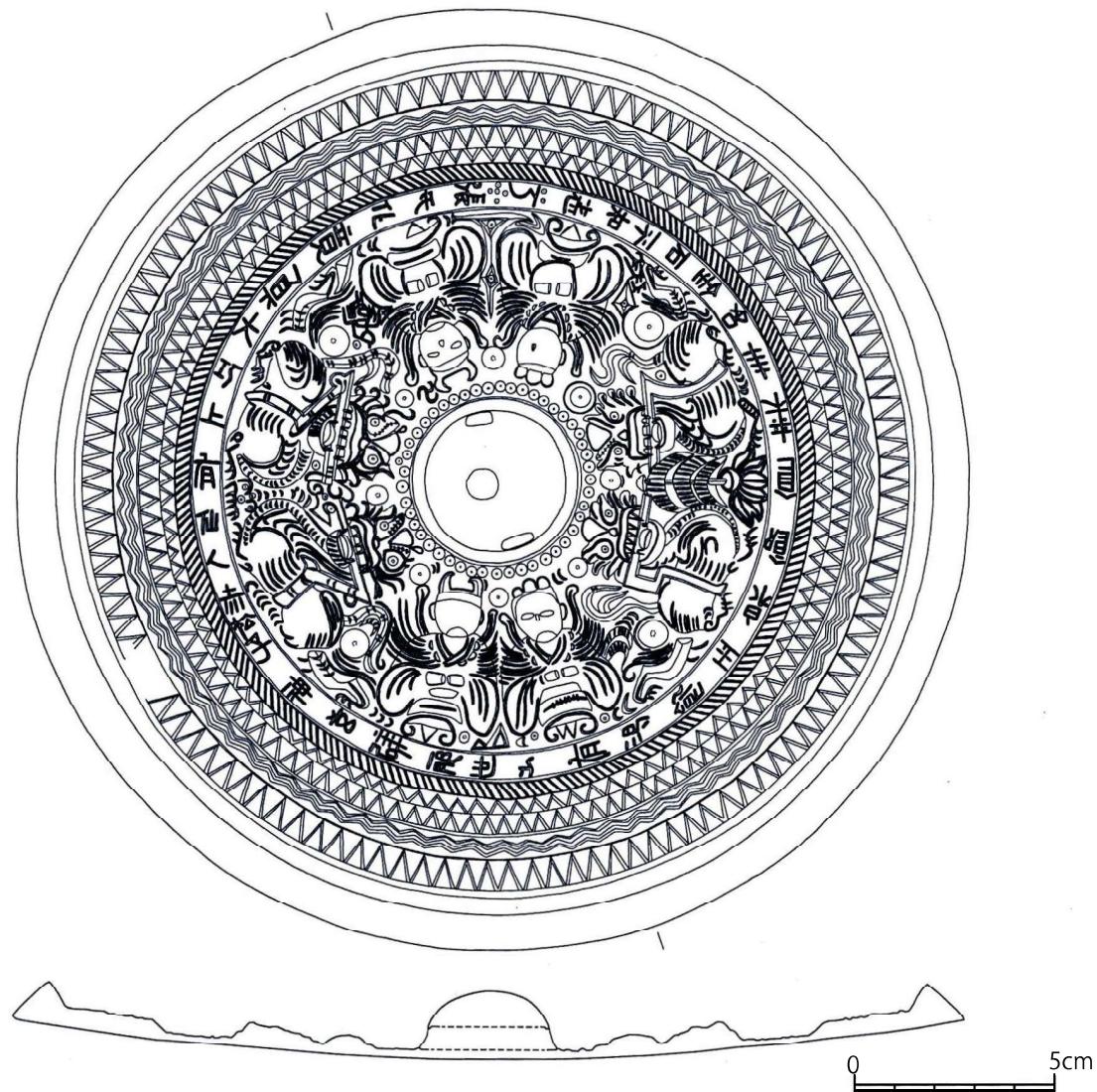
近年、この問題に示唆を与える発見がありました。北九州や山陰地方の弥生中期後半から後期の遺跡で、中国の漢時代の硯「石硯・研石」が発見されています（武末、二〇一六）。ここから考えると、弥生時代の中期後半（紀元前一世紀頃）には、中國大陸・朝鮮半島との交流・交易に携わる特別な人々（大陸・半島の出身者を含む）に限られるとは思いますが、日本列島でも文字を理解し使用する人物がいたと考えられます。このような事実が、考古学的に分かつてきた。また、「魏志倭人伝」によると、倭国（邪馬台国）と魏との間に外交関係があり、正始元年（二四〇）、

魏の使者は魏の皇帝の詔書と印綬を倭王に与え、これに倭王は答礼しています。当然、詔書の意味を理解していたはずで、ヤマト王権の中核の人々は、ある程度、漢文の意味を理解する術をもつていたと考えられます。

そうすると、画文帶神獸鏡の神仙の画像と銘文の意味を理解し、そこから強い印象を受けていた可能性は高い。だからこそ、美しく光輝くだけでなく、詳細に神仙の画像を表現し、銘文に吉祥句を連ねた画文帶神獸鏡は、神仙の特別な力（働き）を持つ貴重な鏡と認識され、これをヤマト王権が各地の首長に配分する。それが、ヤマト王権の求心性を高めるという、政治的に大きな意味を持つていた。こう考えることができるでしょう。この鏡の強い宗教性は、後に受け継がれ、『記紀』における「八咫鏡」「宝鏡」「白銅鏡」といった特別な優れた鏡のイメージの源泉となつていたのかもしれません。

三角縁神獸鏡の時代 画文帶神獸鏡の図像と銘文の意味は「三角縁神獸鏡」へと受け継がれています。この鏡は、魏の景初二年（二三九）、邪馬台国の卑弥呼が魏に遣使をして、その返礼として送られた百枚の鏡とされるものです。日本列島では、すでに百枚以上が発見されていますので、単純に、三角縁神獸鏡と魏の鏡とを結びつけることはできません。その製作地についても諸説があります。日本列島内で製作されたと考えられるものも多数存在しています。三世紀後半か四世紀にかけて日本列島各地の主要な古墳や宗像・沖ノ島の祭祀遺跡などで三角縁神獸鏡は出土しています。

ただし、鏡の背面の神仙・靈獸や銘文の性格は、画文帶神獸鏡を継承しました。具体的に、黒塚古墳（三世紀後半、奈良県天理市）の例でみたいと思います。この古墳からは、三十二枚の三角縁神獸鏡が出土しています（橿原考古学研究所編、二〇一八）。例えば、その中の二十一号鏡（第2図）を見ると、鏡の背面、中心の鉢の周辺、内区には東王父・西王母とみられる神仙と靈獸を表現しています。これを取り囲むように、次の銘文を刻んでいます。



第2図 黒塚古墳出土「三角縁神獸鏡、21号鏡」
(奈良県立橿原考古学研究所編『黒塚古墳の研究』より)

張氏作竟（鏡）、真大巧上、
有仙人赤松子・神玄、辟邪世
少、有渴飲玉泉、飢食棗、壽
如金石、不知老兮。

この意味については、おおよそ以下とのおりに解釈できるでしょう。

張氏が作りし鏡は、真に大巧の上にして、仙人の赤松子・神玄あり。邪を辟けること世に少なり。渴くこと有れば玉泉を飲み、飢えれば棗を食し、壽は金石の如く、老を知らざるなり。

やはり、神仙の像とともに銘文には漢文で吉祥句を連ねており、その宗教性が意識されていたと考えられます。

副葬品の鏡

この宗教性のために、三角縁神獸鏡は、画文帶神獸鏡と同様、恐らくヤマト王權から各地の首長へと供与され古墳などに納められたと考えられます。五世紀以降、ヤマト王權が、後の幣帛の原形となる優れた品々を、地方の首長の祭祀へと供与するという関係性が見られるようになります（笠生、二〇一二）。その初期の形として、三世紀には中国鏡や、それに由来する銅鏡の供与があつたのではないでしようか。

一方で、画文帶神獸鏡と三角縁神獸鏡の間には、古墳の副葬品としての扱い方に相違があります。黒塚古墳では、画文帶神獸鏡は、木棺の内部、遺体の頭に接する部分に一枚だけ立て掛けられた状態で出土しています。これとは対照的に三十二枚の三角縁神獸鏡は、遺体を納めた木棺の周囲に、鏡面を内側にして立て並べられていました。この出土状況からは、木棺の外に多数並べられた三角縁神獸鏡よりも、木棺内の遺体の頭部に一点だけ置いた画文帶神獸鏡を、より重視する意識を読み取ることができます。この意識は、後の五世紀・六世紀へとつながっていきます。画文帶神獸鏡は、五世紀には復刻版が鋳造されて日本列島にもたらされます。その一点が、埼玉県行田市のさきたま古墳群、稻荷山古墳の一号主体部から金象嵌銘鉄剣とともに出土しています。やはり、遺体の頭部に当たる場所に置かれていました（埼玉県教委、一九八〇）。また、六世紀後半の奈良県斑鳩町の藤ノ木古墳においても同様です。朱で赤く塗られた家形石棺の中で遺体の頭部の下に画文帶神獸鏡が置かれていました（橿原考古学研究所編、一九九五）。六世紀代まで画文帶神獸鏡を重視する意識が続いていたといつてよいでしょう。

八咫鏡と三角縁神獸鏡

画文帶神獸鏡から三角縁神獸鏡へという流れがありますが、この三角縁神獸鏡は、『記紀』に出てくる八咫鏡と連絡をとることができます。

『古事記』天石屋戸の段では、「伊斯許理度壳命に科せて鏡を作らしめ」とあります。伊斯許理度壳命（イシコリドメ

ノミコト）は、奈良県田原本町の鏡作坐天照御魂神社に祀られており、この神社には古墳時代の銅鏡が伝わっています（和田、一九九五）。その鏡は、三角縁神獸鏡の中で「唐草文帶三神二獸鏡」と呼ばれるタイプで、現在は内区の部分のみが残されています。これと同じ鋳型で铸造された同范鏡は、愛知県犬山市の中宮古墳から出土しています。四世紀前半に铸造された前方後方墳です。つまり、三世紀から四世紀にかけて作られた、三角縁神獸鏡も、「記紀」で八咫鏡を作つたとされるイシコリドメノミコトと関係して伝えられていたわけで、画文帶神獸鏡に加え、そのモチーフを継承した三・四世紀の三角縁神獸鏡も、「記紀」の宝鏡のイメージの原形となっていた可能性を考えることができます。

三、古墳時代前期の刀剣と信仰

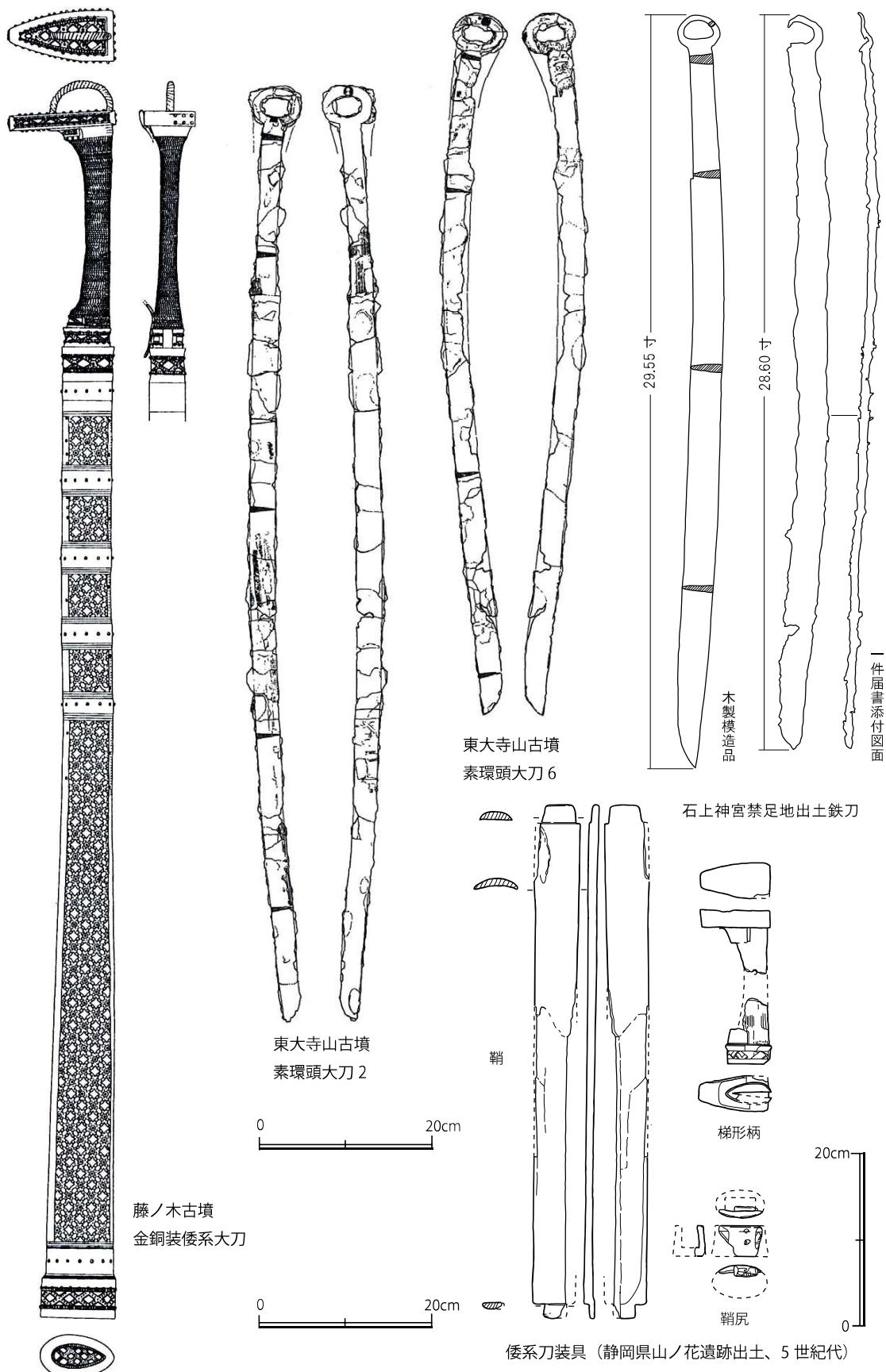
内反素環頭大刀と布都御魂 次に刀剣はどうだったのか見てみましょう。弥生時代の中・後期には、日本列島の西部、西日本の地域を中心に、銅劍・銅鉢といった青銅製の武器が普及し、弥生時代後期には鉄製の刀剣が使われるようになります。鉄製の刀剣としては、後漢時代の鉄製の刀が日本列島にもたらされました。その中に「内反素環頭大刀」と呼ばれる刀があります。代表的な例として、弥生時代後期末期、福岡県糸島市の平原遺跡一号墓から出土した鉄刀をあげることができます（会下、二〇〇七）。この刀は、柄の先端（柄頭）に鉄製の環（環頭）を付け、刀身は内側に反るという特徴的な形をしています。この刀と同形の鉄刀が、奈良県天理市の石上神宮から出土しました。

石上神宮では江戸時代まで、現在の御本殿が建つ場所は、禁足地（足を踏み入れてはならない場所）とされ、周囲を石の籬で区画した聖域でした。石上神宮には、この禁足地に「布都御魂（部靈）」（フツノミタマ）が埋められていますとの伝承がありました。フツノミタマは、「記紀」では、神武天皇が東征の折に天上から下された神劍として登場

します。明治七年（一八七四）、大宮司であつた菅政友は、神劍が土の中に埋まつたままでは恐れ多いと考え発掘を行ひ、神劍を明かにしようとしました。果たして、禁足地から実際に鉄刀が出土したのです。その鉄刀こそ、内反素環頭大刀の型式の鉄刀でした（第3図）。全長は二尺八寸六分（約八六・七センチ）、二尺九寸五分五厘（約八九・五三センチ）に復元できます。

この発掘の記録は、明治政府の神祇官に届けた一件書類として残つております、そこには、この内反素環頭大刀の図面があります（石上神宮編、一九二一九）。この時の発掘では、四世紀頃の翡翠製の勾玉や碧玉製の管玉・琴柱形石製品（玉杖頭）なども出土しています。内反素環頭大刀は、ほぼ完全な形で禁足地の中央付近から出土しましたから、フツノミタマの神劍として、現在は本殿に祀られています。明治七年に出土した内反素環頭大刀と、『記紀』のフツノミタマとの関係は慎重に考える必要があります。それでも、フツノミタマなど『記紀』の神劍の具体的なイメージには、画文帶神獸鏡と同様、二・三世紀頃の中国大陸に由来する優れた刀剣があつたと考えてよいでしょう。

倭系大刀の系譜 この種の刀の柄や鞘は、どのようなものだつたのか。これについては、刀の柄や刀身に残された木の痕跡と、古墳時代の木製の柄・鞘の遺物から推定が可能です。石上神宮と同じ、奈良県天理市に所在する東大寺山古墳は、古墳時代前期、四世紀の前方後円墳で、内反素環頭大刀を含め多数の鉄刀が出土しています（東大寺山古墳研究会他編、二〇一〇）。ここの大刀の柄の環頭に残る木の痕跡を見ると、環頭の下端に柄の木が被り、先端は露出しています（第3図）。この特徴は、日本列島の伝統的な刀の形「倭系大刀」と共通し、その系譜は、六世紀後半の藤ノ木古墳の石棺に納められていた飾り大刀へとつながります。古墳時代の初期に中国大陸から日本列島へともたらされた優れた刀剣は、中国大陆や朝鮮半島の刀の形ではなくて、外装（鞘や柄の部分）を列島の伝統的で、格式の高い



第3図 内反素環頭大刀と倭系大刀（各報告書・文献より）

倭系大刀の形に改めていたと考えられます。この形は、藤ノ木古墳の倭系飾り大刀を経て、神宮御神宝の玉纏太刀へと連続していくことになります。

刀の銘文 先に触れた奈良県の東大寺山古墳から出土した鉄刀の中には、内反素環頭大刀の柄の先端、環頭の部分を、装飾を付けた銅製の環頭に作り替えたものがあります。その内の一点に全長一一〇センチの刀があり、刀身の棟の部分に、金の象嵌で次の銘文を刻んでいます。

中平□（年）五月丙午 造作文刀百練清剛（鈎） 上應星宿（下辟不祥）

この意味は、以下のように解釈できます。

中平□年五月丙午に造りし百鍊・清剛の（百回も鍛えた優れた）刀剣なり。上（天上）では星宿（天体の運行）に応じ、下（地上）では不祥を辟く。

冒頭の「中平」は、中国の後漢の年号で、西暦の紀元後一八〇年から一九〇年に当たります。続いて、この刀の優れた働きが金の文字で漢文により記されています。これに加え、この刀は、全長が一一〇センチという長大なものです。

画文帶神獸鏡と同様、このように非常に優れた中国製の刀剣は、ヤマト王権が各地の首長へ供与し、その政治的な求心性を高める、という役割を果たしていたと考えられます。

また、全長一一〇センチという長さは、後の『記紀』が記す「十拳劍」に相応しいものです。銅鏡と同様、弥生時代末期から古墳時代初期、日本列島にもたらされた優れた刀剣は、『記紀』などが記す神劍のイメージの原形となつていた可能性が高いのではないでしょうか。

四、古墳時代中・後期の鏡・刀剣の銘文と役割

人物画像鏡の銘文 では、これまで述べてきた古墳時代前期の鏡と刀剣は、古墳時代の中・後期の五世紀・六世紀、どのようなになつたのでしょうか。まず、鏡から確認してみたいと思います。五六世紀の鏡と銘文の関係を示す代表例が和歌山県の隅田八幡神社が所蔵する銅鏡「人物画像鏡」です。鏡の背面は、画文帶神獸鏡のモチーフを踏襲しています。ただし、この人物画像鏡は、日本列島で倭の人々の意志により製作された点で、画文帶神獸鏡とは異なります。そして、鏡の背面の外区（外縁部）に、次の銘文を刻んでいます。

癸未年八月曰十大王年予弟王在意柴沙加宮時斯麻念長奉遣歸中費直穢人今州利一人等所白上同二百畢取此竟

銘文の内容については、近年、石和田秀幸氏が以下のような解釈を示しています。

癸未の年八月、をけ曰わ十大王の年、予が弟王の意柴沙加の宮に在す時、しま斯麻長く奉へんことを念ひ、ねが歸き中の費直と穢人今州利を遣はす。二人等の白す所は、銅二百を上ること畢り、此の鏡を取りてとまうす（石和田、二〇〇九）。

この鏡は、伝統的な画文帶神獸鏡の図像と文様の構成を踏襲しています。しかし、そこに記された銘文は、日本列島の人々が自らの考えを記しているのです。中国大陸の人々の思想を表現しているわけではありません。銘文の「癸未の年」は西暦五〇三年に当たると考えられ、斯麻が大王・弟王へと長く仕えることを願うとの文意を読み取れます。古墳時代初期の中国製の鏡（もしくは中国に由来する鏡）の吉祥句ではなく、この時代、大王・王と特定の人物との関係を鏡に明記する点に、大きな意味があつたと考えられます。

稻荷山古墳の鉄劍銘 このような銘文は、ほぼ同時代の五世紀後半の刀剣の銘文と関連します。まず、埼玉県行田市、

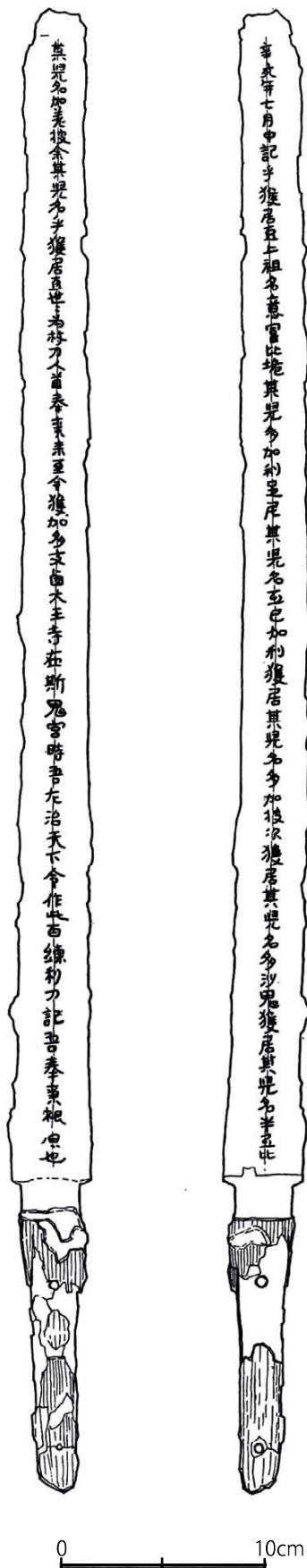
さきたま古墳群の稻荷山古墳から出土した鉄剣の金象嵌銘からみてみましよう。

稻荷山古墳の第一主体部（木棺を礫で固定した埋葬施設）から金象嵌で銘文を記した鉄剣が出土しました。鉄剣の全長は七三・五センチ、表裏の鎬に金象嵌で以下のようないかげな銘文を記しています（第4図）（埼玉県教委、一九八〇）。

表「辛亥年七月中記、乎獲居臣上祖名意富比塊、其兒多加利足尼、其兒名弓已加利獲居、其兒名多加披次獲居、其

児名多沙鬼獲居、其兒名半弓比」

裏「其兒加差披余、其兒名乎獲居臣、世々為杖刀人首奉事來至今、獲加多支齒大王寺在斯鬼宮時、吾左治天下、令作此百練利刀、記吾奉事根原也」



第4図 稲荷山古墳出土「金象嵌銘鉄剣」
(埼玉県教育委員会編『稻荷山古墳』より)

銘文は、「辛亥年七月中に記す」から始まります。そして、最も古い祖先「上祖」、名は「オホヒコ」から「ヲワケの臣」にいたる八代の系譜と名前を、「上祖」と「その児（こ）」という関係で記しています。続く銘文は、以下のように読めるでしょう。

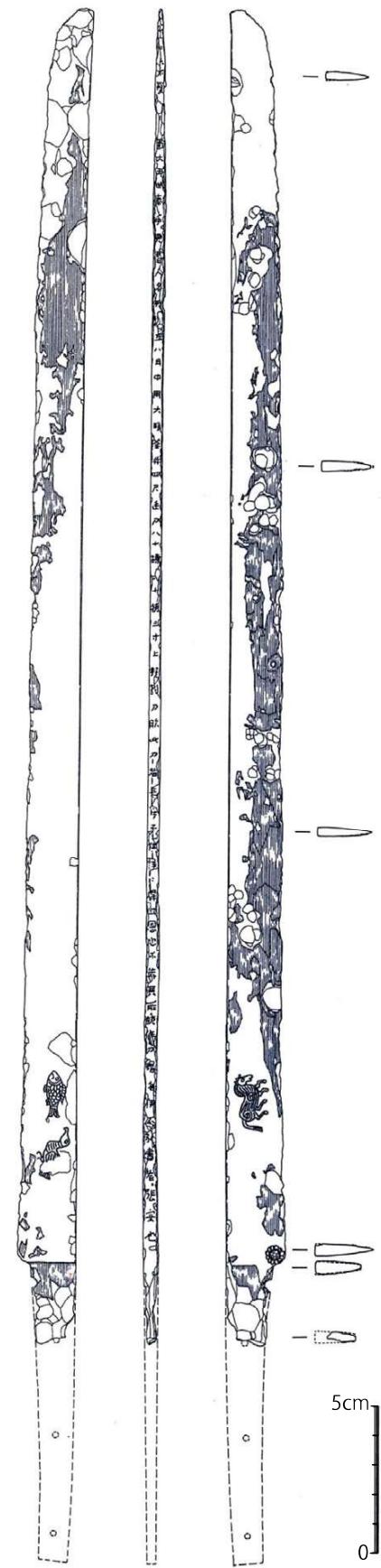
世々杖刀人の首となり、奉事し来たりて今に至る。獲加多支齒大王（ワカタケル大王）の寺（役所）斯鬼の宮に在りし時、吾は天下を左治し、此の百練の利刀を作ら令め、吾が奉事の根原（根源）を記すなり。

稻荷山古墳の築造年代は、出土した須恵器の型式（陶邑編年TK四七型式）から五世紀後半と推定でき、「辛亥年」は、西暦四七一年を当てるのが妥当と考えられます。ここにある「ワカタケル大王」は、『古事記』の「大長谷若建命」、『日本書紀』の「大泊瀬幼武天皇」、つまり雄略天皇に当たります。この鉄剣には上祖からの系譜を強調し、杖刀人（杖・刀を携えた武官的な官僚）として代々大王に仕えた経緯を鉄の剣に金の文字で記しています。そこに大きな意味があつたといつてよいでしょう。

江田船山古墳の鉄刀銘 西日本で類似する例としては、九州の熊本県和水町の江田船山古墳から出土した鉄刀があります。一部に欠損はありますが、現在の全長は九一センチ。刀身の棟の部分に銀象嵌で文字を記しています（第5図）。棟に文字を象嵌するところは、東大寺山古墳の鉄刀と同じです。銘文は、以下のとおりです。

治天下獲□□□齒大王世、奉事典曹人名无（利）弓、八月中、用大鐵釜、并四尺廷刀、八十練（九）十振、三寸
上好（刊）刀、服此刀者、長壽、子孫洋々、得□恩也、不失其所統、作刀者名伊太（和）、書者張安也。
銘文の中には文字が判読できず、意味が取りにくい部分はありますが、次のように解釈されています。

天の下を治らしめしし獲□□□齒大王（ワカタケル大王）の世、典曹に奉事せし人、名は无利弓（ムリテ）、八月中、



第5図 江田船山古墳出土「銀象嵌銘鉄刀」

(東京国立博物館編『江田船山古墳出土国宝銀象嵌銘大刀』より)

大鉄釜を用い、四尺の延刀を并わす。八十たび練り、九十たび振つ。三寸上好の刊刀なり。此の刀を服する者、長寿にして子孫は洋々、□恩を得る也。其の統ぶる所を失わず。刀を作る者、名は伊太和（イタワ）、書する者は張安也（東京国立博物館編、一九九三）。

まず、天下を統治するワカタケル大王へムリテという人物が「典曹」として仕えたことを明記します。典曹は「曹（役所もしくは官吏）を典（つかさど）る、と読むことができます。稻荷山古墳の鉄劍銘文のヲワケの臣が杖刀人という武官的な性格を持つのとは対照的に、江田船山古墳のムリテの「典曹」は、文字の意味から役所や官吏を統括する文官的な性格を推定できます。続いて、この刀を製作した経緯を記し、さらに、古墳時代前期の銘文と同様に吉祥句の「長寿、子孫洋々、□恩を得る、統ぶる所を失わず」を連ねています。そして、最後に作刀者のイタワと文字を記した張安の名を刻みます。張安は、恐らく朝鮮半島から渡来した、文字に長けた人物だったのでしょう。江田船山古墳の鉄刀銘は、ワカタケル大王とムリテの関係を明記しながら、伝統的な吉祥句を併記する点に特徴があるといつてよいでしょう。

銘文の性格 日本列島で書かれた、五世紀・六世紀の鏡・刀剣の銘文と、中国に由来する三世紀のそれらとの間には、四世紀の石上神宮の七支刀の銘文があります。この銘文には、「泰和四年五月十一日丙午正陽。（中略）百濫（済）□世□。奇生聖音。故爲倭王旨造」とあり、「泰和四年」は、東晋の太和四年（三六九）と考えられ、百濟で倭王のため作ったと解釈できます（福山、一九五一）。

百濟で作られた七支刀に統いて、五世紀代、日本列島で作られた稻荷山古墳の鉄劍や江田船山古墳の鉄刀の銘文は、日本列島の人々の意志で記されるようになります。ヤマト王権の大王・弟王へ仕える斯麻、大王に杖刀人として仕えたヲワケノ臣、典曹として仕えたムリテ。このような大王・王と斯麻・ヲワケノ臣・ムリテとの関係を明記し主張するところに、この時期の銘文は重点を置いています。この点で、五世紀・六世紀の鏡・刀剣の銘文は、三世紀代の中国起源の鏡・刀剣の銘文と大きく異なりますし、ここに大きな意味があると考えられます。日本列島の人々が渡来人の

助けを受けながら、漢字で自らの意志を鏡・刀剣に刻んでいる。そこで大王との関係を明記することが、社会的に重要な意味を持つ。五・六世紀は、そのような時代となっていたのです。

また、稻荷山古墳の鉄剣銘文は、冒頭に「上祖オホヒコ」から連続する八代の系譜を記します。「上祖」の文字は、『日本書紀』においても使われている言葉です。「遠つ祖（とほつおや）」と、子孫「児（こ）」で系譜の流れを説明します。この系譜を、五世紀の山古墳の鉄剣銘は、「上祖（とほつおや）」と、子孫「児（こ）」で系譜の流れを説明します。この系譜を、五世紀の段階では、既に古い伝統的な武器となりつつあつた剣を、わざわざ選んで刻んでいる。古くから続く一族の系譜。それを刻むに相応しいものとして、伝統的な武器の剣を選択していた可能性を考えることができます。

このように、ヤマト王権の大王と地方首長の関係を明記して確認する。さらに、自らの系譜を明記する。五世紀の日本列島では、大王との人間関係と特定の祖先からの系譜が、有力な氏族が活動する上で、大きな意味を持つようになつていていたのです。ただし、その銘文を刻む対象は、飽くまでも鏡と刀剣を選んでいた。三世紀以来の中国製の鏡や刀剣に対する特別な意識が存続しており、大王との関係や一族の系譜といった重要な事柄を記す対象としていたのです。

王が賜う刀 その一方で五世紀代には、稻荷山古墳や江田船山古墳の刀剣とは異なる銘文を刻む刀剣があります。ヤマト王権から地方の中小の首長へと供与したとみられる刀剣です。その例が、東国の千葉県市原市の稻荷台一号墳から出土した鉄剣で、金象嵌で銘文を記しています。年代は、ともに出土した須恵器の型式から稻荷山古墳のものよりも古い五世紀中頃と考えられ、鉄剣の年代は五世紀前半に遡る可能性が高い（白石、一一〇〇三）。剣身の柄に近い部分に「王賜□□敬（安）」「此廷（刀）□□□」と金象嵌で文字を記しています。冒頭の「王賜」は、「王が賜う」と読み、この剣は、ヤマトの王が地方の首長に下賜した剣と理解できます。五世紀当時、王が下賜・供与するタイプの

刀剣も存在していたことになります。

列島内の各地では、五世紀の中頃までに神祭りの痕跡「祭祀遺跡」が残されるようになります。そこからは、当時の最新の鉄製の武器や農具・工具、貴重な鉄素材の鉄鋌、それから初期の須恵器などが出土します。これらは、当時の最先端技術を象徴するもので、ヤマト王権から地方首長へと供与され祭祀の場で捧げられたと考えられ、後の幣帛の原形に当たる品々です。これと同様のルートでヤマト王権から供与された刀剣があり、その一つが、稻荷台古墳の「玉賜」銘の鉄剣であつたと言つてよいでしょう。

五世紀の画期 これまでみてきたように、五世紀は日本列島における古代国家の形成の中で大きな画期になつていた可能性が高い。稻荷山古墳の銘文では、『記紀』が記す「祖」や「上祖・遠祖（とほつおや）」の原形を直接見ることができます。実際に、稻荷山古墳は、さきたま古墳群の中で最も古い前方後円墳です。そして、その形は、前方後円墳の墳丘に、長方形の周溝（墳丘の周囲の堀）を組み合わせた特徴的な形をしています。さきたま古墳群では、中核となる前方後円墳は、この特徴的な形を六世紀にかけて代々継承しました。七世紀になると、全国的な趨勢に合わせて方墳「戸場口山古墳」が造られます。五世紀後半から七世紀の直前まで、代々同じ形の前方後円墳を造り続けています（高橋、二〇〇五）。この現象は、一つの系譜に連なる人々が、同じ場所に代々古墳を造営し古墳群を形成した結果です。そこには、鉄剣の銘文の系譜が示す系譜意識が、古墳の形や古墳群の景観に反映されているといつて良いのではないかと考えています。その起点が、五世紀後半にあり、六世紀・七世紀へとつながっていくのです。

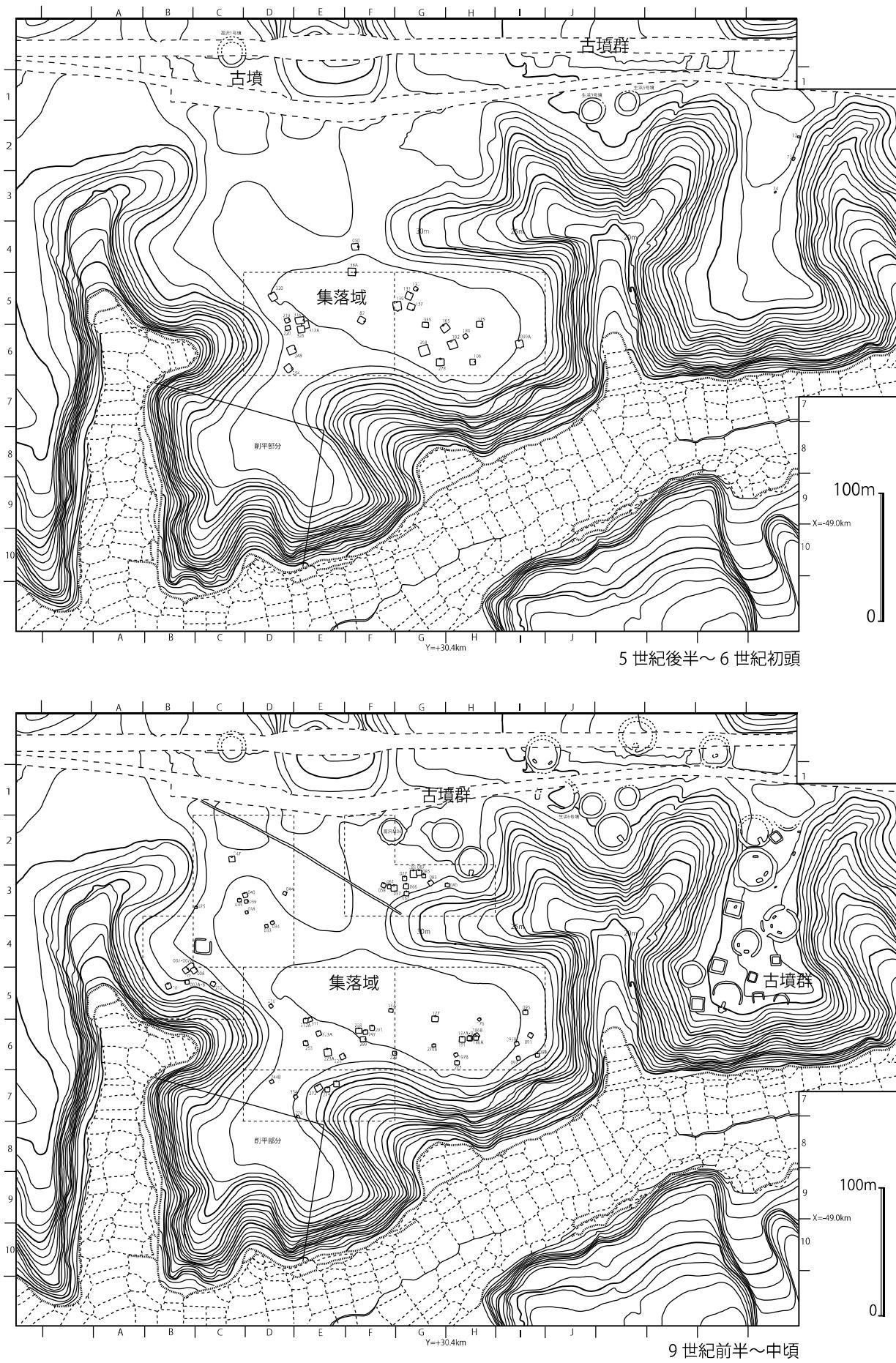
五世紀の画期は、九州、宮崎県の西都原古墳群でも確認できます。西都原古墳群では古墳時代の前期、四世紀初頭から前方後円墳を造り続けており、五世紀前半には巨大な男狭穂塚古墳（帆立貝式古墳、墳丘長一七六メートル）と

女狭穂塚古墳（前方後円墳、墳丘全長一七六・三メートル）が出現します。ところが、この後を境に、古墳の墳丘規模は急速に縮小し、その状態で六世紀・七世紀へと続き、群集墳化して存続しました（北郷、二〇〇五）。やはり、五世紀が大きな画期となつて、六世紀・七世紀へとつながっていく。このような画期が西都原古墳群でも確認できます。五世紀後半を境に七世紀につながつてくる古墳群が形成されるわけです。

古代景観の成立 この変化は、古墳群だけの問題ではありません。五世紀の後半頃、八世紀・九世紀につながつていく集落が成立します。奈良・平安時代につながる地域の枠組・景観の原形が、五世紀頃に作られると考えられる。集落や耕作地（田畑）からなる古代の地域景観が形成されます。先ほど、サイモン先生のお話で「景観」というキーワードがありました。日本列島で古代の地域の景観が成立する上で、五世紀という時代は大きな画期となつていたのです。

具体的な集落遺跡の事例を見てみましょう。ここに示した図面（第6図）は、千葉県千葉市の高沢遺跡という集落遺跡の全体図です。集落のほぼ全域と周辺の古墳群を発掘調査しています。五世紀後半になると、それまで空白地であつた高沢遺跡の台地上に堅穴建物が作られ始め集落が成立します。この集落に対応して北側に、五世紀末期までに、古墳が築造され、古墳群の形成が始まります。この集落と古墳群の位置関係（景観）が六世紀・七世紀・八世紀と継続し九世紀後半まで維持されました。五世紀後半にできた地域の景観、生きている人々が生活する「集落」、その人々が死後に行く「墓域（古墳群）」の位置関係、景観が、五世紀から九世紀の平安時代まで継承し維持される。この景観は、十世紀になると集落は消滅して大きく変化することになります（笛生、二〇一二）。

地域景観の変化の画期は、日本列島における長い人類の歴史の中で幾つか存在するわけですが、その一つに、五世纪を加えることができるでしょう。それは、さきたま古墳群といった大古墳群を造り、祖先（上祖）からの系譜意識



第6図 高沢遺跡の景観比較（ 笹生衛『日本古代の祭祀考古学』より）

を共有した人々だけの問題ではない。一般的な集落を作り生活した人々も、集落と墓域（古墳群）の位置関係を維持した事実から、系譜意識を共有し、それに裏打ちされた形で集落と墓域の景観を維持していたと考えてよいでしょう。

五世紀代、このような景観の変化と並行して、日本列島の人々の意志により大王との関係を示し、自らの系譜を明記する鏡・刀剣が製作されていたのです。その銘文が示す大王との人間関係や系譜意識は、地域景観と同様に、八世紀・九世紀のそれらの原形になっていたと見てよいでしょう。

五、まとめ

最後に、これまでに話してきた内容を、まとめておきたいと思います。

中国文化と倭人の意思 まず、三世紀、東アジアの文化的な中心の中国で作られた優れた銅鏡、鉄刀は、政治的に大きな意味を持つていました。初期のヤマト王権が、これらの優れた鏡・刀剣を入手し、周辺や各地の首長に配分する。それは、ヤマト王権が中心となり各地の首長を統合する上で大きな役割を果たしました。その理由は、単に鏡・刀剣が美しく優れていたというだけではなかったと思われます。銅鏡には神仙・靈獸の図像と吉祥句を含む漢文の銘文があり、鉄刀にも漢文の吉祥句を刻むものがあつた。そして、三世紀の日本列島の人々（倭人）は、ここに強い宗教性を認めていた。このため、銅鏡や鉄製の刀剣に特別な意識を持つようになつたと考えられます。そして、その強い宗教性から、この時期の優れた「画文帶神獸鏡」や鋭利な鉄刀「内反素環頭大刀」などは、後の『記紀』が記す「宝鏡」や「神劍」のイメージの原形となっていた可能性を指摘できます。

これを受けて五世紀から六世紀、大王と各地の首長との関係を確認し、自らの系譜を銘文として記す鏡・刀剣が作

国家形成と鏡・刀剣

られるようになる。その銘文は中国のものではなく、倭国の人々の考え方・意志にもとづいていた。ここが非常に重要な点です。これら鏡と刀剣は、いずれも「大王」の称号を使い、刀剣の銘文では、大王が統治をする国家領域「天下」の考え方を反映して記されています。「天下」という言葉と考え方は、恐らく『礼記』などの漢籍からの影響とみてよいでしょう。それは、四世紀後半から五世紀代、朝鮮半島や中国大陆との人的、物的な交流・交通が活発化する中で、日本列島にもたらされたといつてよい（田中、二〇〇五）。

また五世紀には、各地の祭祀の場や、七世紀・八世紀・九世紀とつながる古墳群、集落の景観が形成され始める。古代日本の地域景観の原形が形成される時期といつてよい。これと対応するように、五世紀の鏡や刀剣の銘文に記された、大王と各地の首長の関係、首長の祖先（上祖）の系譜は、後の『記紀』が記す天皇と各氏族との関係や系譜の原形となっていたと考えられます。

『記紀』の宝鏡・神剣へ では、最後に『記紀』との関係に触れておきたいと思います。三世紀におけるヤマト王権の形成。この背景には、先進的な中国の技術と思想を象徴する銅鏡や鉄製の刀剣の存在がありました。本来、銅鏡は、中国では顔を映す化粧道具でした。当然、刀剣も武器です。日本列島では、その優れた特性（光り輝く精緻な造形と、鋭利な切れ味）に、吉祥句の内容も影響し、化粧道具の鏡と武器の刀剣が、特別に神聖視されたのです。

そして、五世紀、ヤマト王権の王は「大王」の称号を使用し、大王が統治する「天下」という国家領域の意識が成立します。中国・朝鮮半島の技術・思想を受け入れながら、日本列島、倭国の独自の思想・信仰が形成され、倭国の人々の意志にもとづく銘文を鏡・刀剣へ記すことになる。銘文を記す対象は、あくまでも銅鏡と鉄製の刀剣でした。古代国家の形成との関係で、また信仰面で、鏡・刀剣は、三世紀から五・六世紀代、常に特別な意味を持ち続けていたのです。

このような三世紀から五・六世紀にかけての流れを基礎として七世紀後半に、倭国は律令国家「日本」へと転換し、「大王」の称号は「天皇」へと変化、『記紀』の編纂が始められた。この編纂作業の中で三世紀以来、重要な機能を果たし続けてきた銅鏡と刀剣が宝鏡と神劍へと位置づけられ、その伝統は後の日本文化に受け継がれていく。このように考えてよいのではないでしようか。鏡・刀剣・勾玉は、神道でも重要な器物ですが、この背景には非常に長い歴史があり、東アジア的な広い視野の中で考える必要があると思います。

以上で私の話は終わりとさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

参考文献

- ・石和田秀幸「隅田八幡神社人物画象鏡銘釈読考——末尾十文字の新解釈——」『文化財学報』二十七集、奈良大学文学部文化財学科、二〇〇九。
- ・石上神宮編『石上神宮寶物誌』大岡山書店、一九二九。
- ・会下和宏「弥生時代の鉄剣・鉄刀について」『日本考古学』第二三号、日本考古学協会、二〇〇七。
- ・北郷泰道『西都原古墳群 南九州屈指の大古墳群』同成社、二〇〇五。
- ・車崎正彦「稻荷山古墳出土の画紋帶環状乳神獸鏡を考える」『ワカタケル大王とその時代——埼玉稻荷山古墳』山川出版社、二〇〇三。
- ・埼玉県教育委員会編『埼玉稻荷山古墳』埼玉県教育委員会、一九八〇。
- ・笛生 衛『日本古代の祭祀考古学』吉川弘文館、二〇一二。

- ・ 笹生 衛『神と死者の考古学』吉川弘文館、二〇一六。
- ・ 白石太一郎「稻荷台古墳群」『千葉県の歴史 資料編 考古2（弥生・古墳時代）』千葉県、二〇〇三。
- ・ 高橋一夫『鉄劍銘一一五文字の謎に迫る 埼玉古墳群』新泉社、二〇〇五。
- ・ 武末純一「邪馬台国時代前後の交易と文字使用」『纏向発見と邪馬台国の全貌』KADOKAWA、二〇一六。
- ・ 田中史生「武の上表文 もうひとつの中アジア」『文字と古代日本2 文字による交流』吉川弘文館、二〇〇五。
- ・ 東京国立博物館編『江田船山古墳出土 国宝 銀象嵌銘大刀』吉川弘文館、一九九三。
- ・ 東大寺山古墳研究会、天理大学・天理大学付属天理参考館編『東大寺山古墳の研究』真陽社、二〇一〇。
- ・ 奈良県立橿原考古学研究所編『斑鳩 藤ノ木古墳 第二・三次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会、一九九五。
- ・ 奈良県立橿原考古学研究所編『ホケノ山古墳の研究』奈良県立橿原考古学研究所、二〇〇八。
- ・ 奈良県立橿原考古学研究所編『黒塚古墳の研究』八木書店、二〇一八。
- ・ 速水信也「小郡若山遺跡3区出土の多鈕細文鏡」『考古学雑誌』第七十九巻、第二号、日本考古学会、一九九三。
- ・ 福永伸哉『三角縁神獸鏡の研究』大阪大学出版会、二〇〇五。
- ・ 福永伸哉「前方後円墳の成立」『岩波講座 日本歴史 第1巻◆原始・古代1』岩波書店、二〇一三。
- ・ 福山敏男「石上神宮の七支刀」『美術研究』第一五八号、東京文化財研究所、一九五一。
- ・ 義江明子「鉄劍銘「上祖」考」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一五二集、国立歴史民俗博物館、二〇〇九。
- ・ 和田 萍「第三章 第二 鏡と神仙思想」『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』中、塙書房、一九九五。